

Title	子どもの心理社会的不適応に関する文献的研究 : 2. 不適応の影響要因について
Author(s)	出野, 美那子
Citation	生老病死の行動科学. 2007, 12, p. 35-45
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/10891">https://doi.org/10.18910/10891</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 子どもの心理社会的不適応に関する文献的研究 — 2. 不適応への影響要因について —

### A review of children's psychosocial maladjustment : 2. Causal factors

(大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程) 出野 美那子

#### Abstract

Many factors, such as care giver's personal factor, interpersonal factor with care giver, social factor, child's own genetic factor, develop child's psycho-social maladjustment in complicated way. This article focused on psychosocial maladjustment from infant to preadolescents, and reviewed the recent empirical studies about factors influencing children's psychosocial maladjustment with the view of personal factors, factors of environment and factors of interaction with environment. Future prospects are also discussed.

Key word : psychosocial maladjustment, preadolescent, personal factor,  
relationship with care giver, environment

#### I はじめに

子どもの不適応行動の発現には、養育者の個人的要因、養育者からの相互作用的要因、社会的要因、子ども自身の器質的要因など様々な要因が複雑に絡み合って影響を及ぼす。1990年前後までは、**maternal/paternal deprivation** (母性的/父性的養育の欠如) や親子間葛藤が青年期の不適応を招くという一方向的考えが主流であったが (Neiderhiser, Reiss, Hetherington & Plomin, 1999 ; 菅原, 2004)、親子関係や環境へ子どもの遺伝子型の行動発現が影響を及ぼし、相互的に作用し合う (Plomin, 1994 ; Plomin, Reiss, Hetherington & Howe, 1994) などのより複雑な要因が見出されている。例えば、攻撃性に繋がるものとして、攻撃性の高さに繋がりうる遺伝的要因と、親子間葛藤のような攻撃性を促進する状態を対人関係様式として学習する状況とが相互作用的に影響し合い、不適応が発現する場合がある (Haapasalo & Tremblay, 1994)。心理社会的不適応への影響要因に関するモデルは、それら単一の要因の影響だけでなく、複数の要因が交絡し、また一時点だけでなく相互に影響を与え合いながら継時的に影響する双方向的なモデルへと移行している。このような双方向的な視点による研究は着手され始めたところであり、また遺伝的要因は双生児研究、縦断研究によるため、方法論的に実施が難しく研究自体は少ない。

本論では、乳幼児期から青年期前期における心理社会的不適応への影響要因に関して、個人的要因と環境要因、環境との相互作用に関する要因とに分けて最近の知見を概観する。本論における心理社会的不適応として、精神疾患に限らず心理社会的に援助対象とされる症状や行動全般を扱うものとする。精神疾患に限定されない心理社会的問題を扱うことで、疾患発症の前段階の不適応状態に対して、援助を行うための重要な情報を得ることができ、治療や援助によってより大きな効果を得ることに繋がると思われる。

## II 個人的要因

**遺伝的要因** 遺伝子型の不適応行動の発現への影響については、動物や人間の研究から攻撃的行動に関連することが明らかになっているモノアミン酸化酵素 A の活動の高低によって、同じように重篤な虐待的養育を受けても反社会的行動の出現頻度が異なることが見出された (Caspi, McClay, Moffitt, Mill, Martin, Craig, Taylor & Poulton, 2002)。一卵性および二卵性双生児とその家族を対象とした縦断的研究 (菅原・石浦・酒井・木島・菅原, 2003) では、環境要因に関わる変数 (人口統計学的変数、きょうだい役割、親の養育態度・愛着感、ライフイベント、住居や学校など) を共有/非共有環境とし、双生児をマッチングさせて遺伝要因とする遺伝分析を行い、不適応行動への影響を検討している。それによると、攻撃的・非行的行動には遺伝要因54.0%、共有環境要因21.4%、非共有環境要因24.6%の影響、引きこもり・不安や抑うつ・身体的訴えには遺伝要因19.2%、共有環境要因48.6%、非共有環境要因32.2%の影響が見出された。Neiderhiser et al. (1999) も、10-18歳時点、13-21歳時点の二時点で親の関わりと子どもの不適応行動との関連について、遺伝要因、共有環境要因、非共有環境要因の影響を検討しているが、遺伝要因のみが影響を及ぼしていたことを見出した。

**性格特性** 性格特性の影響について本邦では、触法/ぐ犯行為に対するものが主に検討されている。一般の中学生と高校生において、自尊感情の喪失、自己主張の強さ、自分の将来を見つめることのない安楽指向の強さ (鈴木・西村・高橋, 1984)、セルフコントロールの低さ、刹那的享乐的志向の強さ (鈴木・鈴木・原田・井口, 1996) が怠学、無断外泊、自宅からの金品持ち出し、飲酒、喫煙、いじめなどの不適応行動を取る傾向の強さや経験の有無と関連していた。

## III 環境要因

**死別や離別などの喪失体験や災害などの出来事による直接的影響** 成人の悲嘆反応については Freud (1926) の提唱に始まり、精神力動的な研究から実証的研究に至るまで積み重ねられており、Bowlby (1980) は、愛着対象の喪失に対して成人は無感覚、思慕、混乱と絶望などの反応を表出し、類似した反応を4-5歳児も表出することを見出している。また両親が別居あるいは離婚した場合について Kiatskin (1972) は、就学前の子どもの不安や悲哀の表現として、偏食、夜尿、夜驚、痲癩などの退行現象が起きることを示している。これらの反応は、愛する人を失った場合に生じるストレスの正常な反応である (Parkes, 2001)。また災害や事故など生命を脅かす出来事による反応として、侵入性症状、回避性症状、過覚醒症状を中心症状とする PTSD (Post Traumatic Stress Disorder) が挙げられる (American Psychiatric Association, 1994)。

**喪失体験や災害などの出来事の長期に渡る影響** 喪失体験については、上述したような直接的影響のみならず、長期に渡る影響が仮定され様々な検討がなされている。文献研究では白井・小西 (2004) が、遷延化/遅発性の悲嘆も含めた病理的な複雑性悲嘆と PTSD について、「切望と探索」と「恐怖と脅威」が各々中心にある点が大きな違いであるとしながらも、両者の反応の類似点は侵入再体験、回避、過覚醒の三つに大別されると述べている。Bendikson & Fulton (1975) は縦断研究において、家族との離別経験と精神的健康との関連を検討し、15歳時の家族構成によって両親健在群、死別群、離別群に分けたところ33歳時に死別群及び離別群の方が健在群に比べ、長期にわたる疾病経験、極端な情緒不安がより多く出現したことを示し

た。北村（1984）は、抑うつを呈していた患者群の方が、健康な群に比べ、10歳以前に親との死別・離別という喪失体験を経験している率が高いことを示している。また田中（2006）は、否定的なライフイベントの嫌悪感が増加すると、損害回避の高い中学生において抑うつが高まることを見出した。小学4-6年生において、酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村（2002）は引越しという形成段階にある仲間関係の分断・居場所の喪失が抑うつを高めたことを示唆した。

**友人関係に関する要因** 青年期においては、教師や親といった大人の規範・価値観から自律的な行動をとろうとする傾向が著しくなる一方で、同輩集団から強く影響される（松井, 1990）。鎌原（2001）は、逸脱行動の被害者が加害者となる可能性について、加害者自身いじめ、ゆすりなどの被害に遭っていて、そこから逃れるために加害者の側に加担するということが考えられると指摘している。加えて、いつも一緒に行動する同輩集団から逸脱しないために、他の子どもの行動に同調しなければならず問題行動をしてしまうという場合も考えられる。酒井・菅原・眞榮城・菅原ら（2002）は中学生において、親友との良好な信頼関係は、自己評定による学校不適応の下位要素とした「（教室での）不安な気分」、「（学校での）孤立傾向」などの低さと関連する一方で、先生に反抗する、友だちをいじめる、授業中さわぐなどの行動の高さと関連していることを見出した。このことは、親友との関係は、同輩集団からの影響を受けることに繋がり、中学生においては学校不適応とされる行動を高めることに繋がりうることを示したものと見えよう。

Garnefski & Dijkstra（1996）は高校生を対象とし、親友と呼べる存在がない個人ほどけんかや盗みなどの問題行動や、うつ病や集中力の欠如などの情緒的な問題があることを見出しており、本邦でも中山・藤内・北山（1997）が、親友の存在が中学生の主観的健康度を高めることを報告している（酒井・菅原・眞榮城・菅原ら, 2002）。

**養育者の要因** 親自身の要因の影響も検討されている。親や家族の適応度が低いほど、心的外傷体験後における児童の心的外傷性症状の数が多く（Ajdukovic, 1998 ; Breton, Valla & Lambert, 1993 ; Deblinger, Steer & Lippmann, 1999）、抑うつとの度合いが強く（Deblinger et al., 1999）、問題行動も多い（Deblinger et al., 1999）ことなどが指摘されている（青木, 2005）。また、心的外傷体験後における親の不安の高さ（Ajdukovic, 1998）や抑うつとの程度（Deblinger et al., 1999）、一般的な精神科的症状の増加（Breton et al., 1993）、子どもへの過保護（MacFarlane, 1987）、罪悪感を持っていること（Deblinger et al., 1999）などが、児童の心的外傷後の適応と関連すると報告されている（青木, 2005）。同様に Rossman, Bingham & Emde（1997）は、母親の心的外傷性症状が高ければ、子どもの心的外傷性症状や抑うつ・引きこもりなどの問題が多く、母親が子どもに支持的であることが子どもの心的外傷性症状、反社会的／非行的行動を減じることを見出している。

**養育者との関係や養育環境に関する要因** Bowlby の愛着理論以来、乳児がこの世に生まれて最初に接する親の関わりが重要視され、乳児と成人を中心に養育環境や親子関係が子どもに及ぼす影響について非常に多く研究されている。

反社会的行動への影響要因は様々な方法によって養育環境との関連が検討されている。例えば、厳しく一貫性のない、効果のないしつけと、後の反社会的行動との関連が明らかにされている（Loeber & Dishion, 1983 ; Patterson, DeBaryshe & Ramsey, 1989）。メタ分析によつては、親の子どもに対する監督不足や親子の関わり希薄さ、親の子どもに対する愛着感の欠如などと、反社会的な問題行動の発達との関連などが見出されている（Loeber & Loeber,

1986)。また酒井・菅原・眞榮城・菅原ら（2002）は、「児童・思春期における親子間の信頼関係に基づいた子どもへのしつけの質、情緒的・物理的なサポートが、同時点での反社会傾向（Patterson, 1986）や攻撃性、薬物使用などの問題行動や抑うつなどの精神的健康に関わることが示されてきた（Flannery, Williams & Vazsonyi, 1999 ; Fondacaro & Heller, 1983 ; Wills & Cleary, 1996）」と述べている。子どもの攻撃性の高さについても、収入の低い家庭の子ども、特に注意探索、攻撃的行動の見られる男の乳児において、親の応答性が低いと、3歳時の混乱した攻撃的行動が増えることが明らかにされている（Shaw, Keenan & Vondra, 1994）。さらに幼児期における親との不安定な関係と児童期における男児の攻撃性との関連が見出されている（Renken, Egeland, Marvinney, Mangelsdorf & Sroufe, 1989）。反対に乳児への母からの応答性が高いと、教師評定の問題行動が低く、子どもは社会的問題解決測度においてより向社会的で攻撃性の少ない反応を選ぶ傾向にあることが見出された（Goldberg, Lojkasek, Gartner & Corter, 1989）。

行動的な問題のみならず、心理的な問題においても養育環境や親子関係の影響が示されている。親の拒否や強制を含む不安定な親子関係は、後の抑うつや不安などの心理的問題に繋がることが見出された（Rubin, Hymel, Mills & Rose-Krasnor, 1991）。また、幼児期における親との不安定な関係と児童期における男児の引きこもり傾向との関連（Renken et al, 1989）や、児童期における親との暖かい関係の欠如と成人期における孤独感の高さとの関連（Perlman & Peplau, 1981）が見出されている。

家族機能や夫婦関係の影響も検討されている。菅原・八木下・詫摩・小泉・瀬地山・菅原・北村（2002）は、家族機能の凝集性の高さが子どもの抑うつを低め、夫婦間の情緒的な絆のあり方が子どもの精神的健康に影響しうることを示唆している。また Emery & OLeary（1982）、Gryncz & Fincham（1990）が、夫婦の意見の不一致や葛藤関係などの夫婦間の否定的な側面は、子どもの攻撃的・反社会的な問題行動、不安や引きこもりなどの抑うつ・神経症的問題などの出現に影響することを報告している（菅原ら, 2002）。

**被虐待体験の影響** 養育環境や養育者との相互作用の中でも、被虐待による影響は非常に深刻なものである。本邦においては臨床的見地から多く報告されており（e. g. 奥山, 1999 ; 奥山・宮本・中島・大川・庄司・西澤・北山・井上, 2000 ; 心的外傷の視点から分類したのが田中・白川（2001））、標準化された評価ツールを用いた基礎的研究、計量的研究は着手され始めた段階であり（e. g. 西澤・中島・三浦, 2000 ; Armsden, Pecora, Payne & Szatkiewicz, 2000 ; 坪井, 2005）、虐待の有無による差異に焦点づけた研究が主流となっている。影響要因については、母親から「殴られた、蹴られた」という虐待的体験をした一般家庭の小学4-6年生において、父親との信頼関係の高いことが抑うつへの緩衝要因として働いていたことを酒井・菅原・眞榮城・天羽・詫摩（2002）が見出している。影響要因の検討は今後の知見の蓄積が必要とされる。

#### IV 環境との相互作用に関する要因

子どもの認知や行動と環境との相互作用については、加藤（2001）が反復した問題行動によって高校中退した少年にインタビューを行っている。従来の研究では教師の期待や教師の特定の生徒へのイメージが生徒の問題行動に影響するといった教師から生徒への一方向的な影響過程が強調されてきたが、教師の期待（指導の持つ意味）は常に直接生徒の問題行動へ影響を与えるのではなく、指導の意味は他生徒との関係にも影響し、他生徒が教師の指導をどう感じたか

に応じて教師の期待が再解釈されると加藤（2001）は指摘している。また Pope & Bierman（1999）は友人評定によって、9-12歳時と13-16歳時におけるイライラしている、引きこもっているなどの問題行動と、友人関係、13-16歳時の盗みや怠学などの反社会的行動との関連を検討し、どのような問題行動も各時点において友人関係に悪影響を及ぼし、13-16歳時の反社会的行動を予測する要因となることを見出している。つまり、不適応行動の発生と友人関係の悪化は相互作用的に影響し合うことが示されている。

菅原らの一連の研究では、0-15歳まで2,300組の一卵性および二卵性双生児とその家族、また妊娠初期より17-18歳時点まで250世帯を対象としたプロスペクティブ研究を行い、不適応行動の発現要因を親子間の相互作用に焦点を当て検討している。妊娠中からの追跡調査（菅原・酒井・菅原, 2003）によると、11歳時点で統制不全型の問題行動が多く出現したグループとほとんど出現しなかったグループの2群について、母親の子どもに対する否定的感情の時間的推移を比較すると、妊娠中から生後1ヶ月目までは差が見られなかった。母親の否定的感情は、5歳時になって初めて8歳時の子どもの問題行動への影響を及ぼしていることが見出された。つまり、もともと母親の子どもに対する否定的感情が強かったから、子どもにこうした問題行動が出現したのではなく、乳幼児期には子どもの問題行動との相互作用によって、母親の子どもに対する否定的感情は深化し、児童期には子どもの問題行動へ否定的な促進要因として働き、両者の間に悪循環が形成されることが見出された。また、思春期の問題行動傾向に対しては、母親の否定的感情の影響は見出されず、親要因の影響力は相対的に弱まり、友人関係や学校要因などの家庭外の要因の影響が顕著になる可能性が示唆されている。この知見は菅原も述べるように、親の養育態度や親との関係が子どもの不適応に影響を及ぼすという従来の知見を大きく覆す結果であると言えよう。

一方で、環境の影響によって器質的変化がもたらされるということが、ここ数年で見出されている。森信（2005）はラット実験により、不適切な養育の影響のみならず、母子分離を幼少期に体験していると、思春期や成熟期においてストレスに対する脆弱性が形成されると述べている。しかし、その後の環境が良好であれば、母子分離によって引き起こされる海馬細胞での物質抑制が修復されることを報告している（Kusaka, Morinobu, Kawano & Yamawaki, 2004）。このような知見は当然ラットと人間の生物学的、進化論的相違はあるものの、Harlow & Harlow（1962）が生まれた直後から数カ月間他のサルと隔離して育てたサルは社会的異常を示すことを見出した実験に通じ、発達早期の養育環境の影響について示唆に富む知見であると言えよう。人間における母子分離の影響を考える上でも重要な示唆を与えるものと期待されている。またネグレクトや虐待などの被虐待体験が、普通とは異なる右脳のストレス対応システムの構造化を引き起こし、それによって脳機能が障害され、情動調節障害、行動調節障害の起こることが見出されている（Schore, 2001；Perry, Pollard, Blakley, Baker & Vigilante, 1995；渡辺, 2003）。被虐待体験の自己調節機能や愛着に及ぼす影響は臨床的に広く認知されており、自己調節機能・愛着と対人的行動・対人関係における問題との循環的相互作用について医学や心理学の領域から多く指摘されている（e. g. 奥山, 2005；渡辺, 2003；森, 2005）。これらの知見は、喪失体験や被虐待体験が脳機能を介して、直接的・間接的に心理社会的不適応に影響を及ぼすメカニズムを解明するものであると言える。親との離別や死別、程度の酷い被虐待体験などの心的外傷体験は、体験の質や衝撃、主観的認知によって様々な影響を及ぼす。喪失体験や程度の酷い被虐待体験を経験することによって、一般家庭で生活する子どもとは心理社

会的不適応発現の機制が異なってくる可能性もあろう。また子どもがそのような体験をしている場合、親においても何らかの心理的变化があったり、子どもに心理的援助を提供できない状況であったりすることが考えられる。

## V 今後の課題

不適応の背景には、対人的環境が子どもの発達に多大な影響を及ぼし、人格・性格の形成やその後の症状・行動の発現において重要な役割を担っていることが仮定されてきた。そのような仮説に沿って、主に横断的研究によって、心理社会的な不適応への影響要因が検討され、知見の蓄積が進められてきた。また昨今、遺伝子レベルや器質レベルでの心理社会的な不適応への影響が明らかにされている。従来の研究では一般家庭で生活する子どもが対象にされることが多く、親との離別や死別、深刻な事件の被害体験、被虐待体験などの心的外傷体験の影響については、特に本邦において臨床的研究からの提言は多くなされているものの、実証的研究による知見が充分蓄積されているとは言い難い。今後は、このような様々な心的外傷体験の影響を詳細に検討していく必要がある。

また対象者の年齢については、児童期から青年期前期における愛着測度が開発されていないこともあり、愛着方略との関連に限っては乳幼児期や成人期以降を対象とした研究がほとんどである。児童期や青年期においては症状や行動の生起がより問題性の高いものとなることが予測されるため、乳幼児期からの愛着の連続性と不適応との関連やその緩衝要因について、児童期や青年期前期を対象とした更なる検討が求められる。

被虐待体験の影響については、体験の有無によって不適応の生起が異なることは見出されているものの、体験の有無と不適応発現の介在要因については実証的知見が非常に少ない。これは被虐待体験を経験した子どもは他にも多岐に渡る経験をしていることが多く、個別性の強い体験であるため変数という形に分類するのが難しいことと、そのような属性別の統計的検討に、耐えうる対象者数をリクルーティングする難しさが背景にある。しかし実証的研究の意義は大きい。被虐待体験とは認知されないレベルの歪みを持つ対人的環境の中で育ってきた子どもも不適応状態を呈することがあり、被虐待体験を受けても不適応状態を呈さない子どもも存在する。被虐待体験に伴う対人的環境を検討することは、そのような個人差についての示唆が得られ、被虐待児に対する援助だけでなく、不適応を呈する子ども全般への援助に有意義な情報と示唆が得られるものと思われる。

虐待と不適応の介在要因の一つとして今後発展が期待される分野に、対人的環境の及ぼす認知-情動機能への詳細な影響、認知-情動機能を介在した心理社会的な不適応への影響についての研究がある。佐藤（1999）は、ライフイベントの抑うつや日常生活場面での陰性情緒反応へ及ぼす影響が、自己知識の精緻化の程度によって緩衝されることを見出した。また **Pereg & Mikulincer**（2004）は実験場面において情動を伴う課題を用い、愛着分類の相違による認知的機能の相違と情動との関連について検討している。これらの研究は早期成人期を対象としているため本論の対象とは異なるものの、記憶検索方略や情動調節方略と、内在化された自己表や愛着方略との関連、つまり対人的相互作用という変数化の難しい要因との関連を詳細に検討するものである。このような知見によって、被虐待体験における対人関係の歪みがまず記憶検索方略や情動調節方略に影響を及ぼし、歪んだ記憶や情動調節の方略を慢性的に用いるために、器質的变化や不適応の発現をもたらすという仮説を立てることもできる。さらに被虐待体験の

及ぼす認知-情動機能や心理社会的不適応への影響を検討することによって、児童福祉領域に留まらず、教育場面や非行臨床における子どもへの援助や生活の対応への示唆にも繋がると考えられ、今後の発展が期待される。

## VI おわりに

本論では乳幼児期から青年期前期における心理社会的不適応への影響要因に関する知見を概観した。ここで付け加えておきたいのは、不適応という呼称について、忌むべきもの、加療が必要なものという印象が先行しがちであるが、心理社会的に不適応とされる行動は子どもが知らず知らずに選択する自己防衛であり、ある状況において子どもに選択可能な唯一の行動であり（崎尾, 1998）、内的衝動や外的環境に適応しようとした結果であるということである。

現代において、児童期、青年期の子ども達による凶悪犯罪が後を絶たないという重篤なレベルから、日常におけるストレスの増加といった身近なレベルまで、子どもを取り巻く問題は山積している。心理社会的不適応への影響要因について新たな知見を得、先行研究の知見と統合していくことにより、心理社会的不適応の発現の予防と理解、心理社会的不適応の発現後の援助に大きな示唆が得られることが期待される。

## 引用文献

- Ajdukovic, M. 1998 Displaced adolescents in Croatia : Sources of stress and posttraumatic stress reaction. *Adolescence*, 33, 209-217.
- American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition ; DSM-IV*. Washington D. C. (高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸 監訳 1995 DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院).
- 青木 豊 2005 養育環境とストレス性精神障害—養育環境は児童・乳幼児のストレス性精神障害に影響を与えるか?—. *医学のあゆみ*, 212(13), 1103-1106.
- Armsden, G., Pecora, P. J., Payne, V. H. & Szatkiewicz, J. P. 2000 Children placed in long-term foster care : An intake profile using the Child Behavior Checklist/4-18. *Journal of Emotional and Behavioral Disorders*, 8, 49-65.
- Bendikson, R. & Fulton, R. 1975 Death and child : An anterospective test of the childhood bereavement and later behavior disorder hypothesis. *Omega*, 6, 45-59.
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss Vol.3 Loss, sadness and depression*. The Hogarth Press. (黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子 訳 1981 母子関係の理論 III. 対象喪失. 岩崎学術出版社).
- Breton, J. J., Valla, J. P. & Lambert, J. 1993 Industrial disaster and mental health of children and their parents. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 32, 438-445.
- Caspi, A., McClay, J., Moffitt, T. E., Mill, J., Martin, J., Craig, I. W., Taylor, A. & Poulton, R. 2002 Role of Genotype in the Cycle of Violence in Maltreated Children. *Science*, 297, 851-854.
- Deblinger, E., Steer, R. & Lippmann, J. 1999 Maternal factors associated with sexually abused childrens psychosocial adjustment. *Child Maltreatment*, 4(1), 13-20.



- Emery, R. E. & O'Leary, K. D. 1982 Childrens perception of marital discord and behavior problems of boys and girls. *Journal of abnormal Child Psychology*, 10, 11-24.
- Flannery, D. J., Williams, L. L. & Vazsonyi, A. T. 1999 Who are they and what are they doing? Delinquent behavior, substance use, and early adolescents after-school time. *American Journal of Orthopsychiatry*, 69, 247-253.
- Fondacaro, M. R. & Heller, K. 1983 Social support factors and drinking among college student males. *Journal of Youth and Adolescence*, 12, 285-299.
- Freud, S. 1926 *Inhibitions, symptoms and anxiety*. S. E. 20. (井村恒郎・小此木啓吾 訳 1970 制止、症状、不安. フロイト著作集6. 人文書院).
- Garnefski, N. & Diekstra, R. F. W. 1996 Perceived social support from family, school, and peers : Relationship with emotional and behavioral problems among adolescents. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 35, 1657-1664.
- Goldberg, S., Lojkasek, M., Gartner, G. & Corter, C. 1989 Maternal responsiveness and social development in preterm infants. *New Directions for Child Development*, 43, 89-104.
- Grynych, J. H. & Fincham, F. D. 1990 Marital conflict and childrens adjustment : A cognitive-contextual framework. *Psychological Bulletin*, 108, 267-290.
- Haapasalo, J. & Tremblay, R. E. 1994 Physically aggressive boys from ages 6 to 12 : Family background, parenting behavior, and prediction of delinquency. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 62, 1044-1052.
- Harlow, H. F. & Harlow, M. K. 1962 Social deprivation in monkeys. *Scientific American*, 207, 136-146.
- 鎌原雅彦 2001 中高生の逸脱行動と自己評価—逸脱不安を媒介として—. 帝京平成短期大学紀要, 11, 11-17.
- 加藤弘通 2001 問題行動の継続過程の分析 : 問題行動を巡る生徒関係のあり方から. 発達心理学研究, 12(2), 135-147.
- Kiatskin, E. 1972 発達の要素. In I. R. Stuart, & L. E. Abt (Eds.), *Children of separation and divorce*. New York : Grossman. (服部広子・久米 稔訳 1975 離婚・別居の家庭と子供. 家政教育社).
- 北村俊則 1984 児童期の喪失体験と抑うつ状態—マッチド・ペアによる研究— 特集 : 社会・文化精神医学における事例研究—躁うつ病. 社会精神医学, 7(2), 114-118.
- Kusaka, K., Morinobu, S., Kawano, K. I. & Yamawaki, S. 2004 Effect of neonatal isolation on the noradrenergic transduction system in the rat hippocampal slice. *Synapse*, 54, 223-232.
- Loeber, R. & Dishion, T. 1983 Early predictions of male delinquency : A review. *Psychological Bulletin*, 94, 68-99.
- Loeber, R. & Loeber, M. 1986 Family factors as correlates and predictors of juvenile conduct problems and delinquency. In M. Tony, & N. Morris (Eds.), *Crime and justice : Annual review of research : Vol. 7*. Chicago : University of Chicago Press.
- MacFarlane, A. 1987 Posttraumatic phenomena in a longitudinal study of children

- following a natural disaster. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 26, 764-769.
- 松井 豊 1990 友人関係の機能. 齊藤耕二・菊池章夫(編) 社会化の心理学ハンドブック : 人間形成と社会と文化 (pp283-296). 東京 : 川島書店.
- 森 茂起 2005 「心の傷」が子どもの成長に与える影響. *児童心理*, 59(1), 9-14.
- 森信 繁 2005 ストレス脆弱性形成の分子機序. *医学のあゆみ*, 212(13), 1107-1110.
- 中山貴美子・藤内修二・北山秋雄 1997 親子・友人関係が中学生の主観的健康に及ぼす影響 - 思春期の子供を持つ親へのアプローチに向けて -. *小児保健研究*, 56, 61-68.
- Neiderhiser, J. M., Reiss, D., Hetherington, E. M. & Plomin, R. 1999 Relationships between parenting and adolescent adjustment over time : Genetic and environmental contributions. *Developmental Psychology*, 35(3), 680-692.
- 西澤 哲・中島健一・三浦恭子 2000 児童養護施設に入所中の子どものトラウマ反応 - TSCC の結果の分析から - *社会事業研究*, 31, 43-46.
- 奥山真紀子 1999 被虐待児の行動の特徴と臨床的意味 - 特集子ども虐待と心のケア. *世界の児童と母性*, 47, 6-9.
- 奥山真紀子 2005 虐待を受けた子どものトラウマと愛着. *トラウマティック・ストレス*, 3(1), 3-11.
- 奥山真紀子・宮本信也・中島 彩・大川千尋・庄司順一・西澤 哲・北山秋雄・井上登生 2000 被虐待児の精神症状の特徴 - 愛着を含む他者関係および自己制御の問題を中心として - 厚生科学研究報告書 (子ども家庭総合研究事業) (第6/7), 426-446.
- Parkes, C. M. 2001 A historical overview of the scientific study of bereavement. In M. S. Stoebe, R. O. Honson, W. Stoebe et al. (Eds.), *Handbook of bereavement research : Consequences, coping, and care* (Pp.25-46). American Psychological Association, Washington, D. C.
- Patterson, G. R. 1986 Maternal rejection : Determinant or product for deviant child behavior? In W. Hartup & Z. Rubin (Eds.), *Relationships and development*. Hillsdale, NJ : Erlbaum.
- Patterson, G. R., DeBaryshe, B. D. & Ramsey, E. 1989 A developmental perspective on antisocial behavior. *American Psychologist*, 44, 329-335.
- Pereg, D. & Mikulincer, M. 2004 Attachment Style and the Regulation of Negative Affect : Exploring Individual Differences in Mood Congruency Effects on Memory and Judgment. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 67-80.
- Perlman, D. & Peplau, L. A. 1981 Toward a social psychology of loneliness. In R. Gilmour, & S. Duck (Eds.), *Personal relationship : Personal relationships in disorder*. London : Academic Press.
- Perry, B. D., Pollard, R. A., Blakley, T. L., Baker, W. L. & Vigilante, D. 1995 Childhood trauma, the neurobiology of adaptation, and "use-dependant" development of the brain : How stais become traints. *Infant Mental Health Journal*, 16, 271-291.
- Plomin, R. 1994 *Genetics and experience : The Interplay between nature and nurture*. Vol. 6. Thousand Oaks, CA : Sage.

- Plomin, R., Reiss, D., Hetherington, E. M. & Howe, G. W. 1994 Nature and nurture : Genetic contributions to measures of the family environment. *Developmental Psychology*, 30, 32-43.
- Pope, A. W. & Bierman, K. L. 1999 Predicting Adolescent Peer Problems and Antisocial Activities : The Relative Roles of Aggression and Dysregulation. *Developmental Psychology*, 35, 335-346.
- Renken, B., Egeland, B., Marvinney, D., Mangelsdorf, S. & Sroufe, L. A. 1989 Early childhood antecedents of aggression and passive withdrawal in early elementary school. *Journal of Personality*, 57, 257-281.
- Rossman, B. B. R., Bingham, R. D. & Emde, R. N. 1997 Symptomatology and adaptive functioning for children exposed to normative stressor, dog attack, and parental violence. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 36, 1089-1097.
- Rubin, K. H., Hymel, S., Mills, R. S. L. & Rose-Krasnor, L. 1991 Conceptualizing different developmental pathway to and from social isolation in childhood. In D. Cicchetti & S. L. Toth (Eds.), *Rochester Symposium on Developmental Psychopathology Vol. 2* (Pp. 91-122), Hillsdale, NJ : Erlbaum.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・天羽幸子・詫摩武俊 2002 児童・思春期で経験するネガティブ・ライフイベント 子どもの抑うつ傾向の悪化を防ぐ親・きょうだいへの対人的信頼感. *精神保健研究*, 48, 71-83.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応. *教育心理学研究*, 50, 12-22.
- 崎尾英子 1998 コミュニケーション障害の視点から. *教育と情報*, 484, 8-11.
- 佐藤 徳 1999 自己表象の複雑性が抑鬱およびライフイベントに対する情緒反応に及ぼす緩衝効果について. *教育心理学研究*, 47, 131-140.
- Schore, A. N. 2001 Effects of a secure attachment relationship on right brain development, affect regulation, and infant mental health. *Infant Mental Health Journal*, 22, 7-66.
- Shaw, D. S., Keenan, K. & Vondra, J. I. 1994 Developmental precursors of externalizing behavior : Age 1 to 3. *Developmental Psychology*, 30, 355-364.
- 白井明美・小西聖子 2004 PTSDと複雑性悲嘆との関連—外傷的死別を中心に—. *トラウマティック・ストレス*, 2(1), 21-27.
- 菅原ますみ 2004 前方向視的研究からみた小児期の行動異常のリスクファクター : 発達精神病理学的研究から. *精神保健研究*, 50, 7-15.
- 菅原ますみ・石浦章一・酒井 厚・木島伸彦・菅原健介 2003 子どもの問題行動に関連する遺伝的要因と環境的要因 : 双生児を対象とした縦断的研究から. *厚生科学研究報告書 (子ども家庭総合研究事業) (第11/11)*, 322-329.
- 菅原ますみ・酒井 厚・菅原健介 2003 子どもの不適応的行動の発達に関する長期追跡研究 : "子どもの発達と家族の精神保健に関する縦断研究" から. *厚生科学研究報告書 (子ども家庭総合研究事業) (第11/11)*, 330-338.

- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則 2002 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連—家族機能および両親の養育態度を媒介として—. *教育心理学研究*, 50, 129-140.
- 鈴木 護・鈴木真悟・原田 豊・井口由美子 1996 自己申告法による中学・高校生の逸脱行動の広がりとその背景要因に関する研究 2. 経験された逸脱行為のレベルと社会・心理的要因との関連. *科学警察研究所報告*, 37(2), 96-107.
- 鈴木真悟・西村春夫・高橋良彰 1984 中・高校生の逸脱行動に結びつく自己意識の類型. *科学警察研究所報告*, 25(1), 42-59.
- 田中 究・白川美也子 2001 子どものトラウマ 犯罪・いじめ・虐待などを中心に. 厚生労働省 精神・神経疾患研究委託費 外傷ストレス関連障害の病態と治療ガイドラインに関する研究班 主任研究者 金 吉晴 編 心的トラウマの理解とケア. じほう.
- 田中麻未 2006 パーソナリティ特性およびネガティブ・ライフイベントが思春期の抑うつに及ぼす影響. *パーソナリティ研究*, 14, 149-160.
- 坪井裕子 2005 **Child Behavior Checklist/4-18 (CBCL)** による被虐待児の行動と情緒の特徴—児童養護施設における調査の検討— *教育心理学研究*, 53, 110-121, .
- 渡辺久子 2003 児童虐待と心的外傷. *臨床心理学*, 3(6), 819-825.
- Wills, T. A. & Cleary, S. D. 1996 How are social support effects mediated? A test with parental support and adolescent substance use. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 937-952.